

[Report]

Learning of nursing students at psychiatric day-care practical training conducted under the influence of new coronavirus infection (COVID-19)

Takaaki Ide*, Yuri Kawano**, Hisashi Nakagawa***
Yumiko Oshima**** and Madoka Sakaki*****

* Part home-visit nursing care service

** Department of Nursing Faculty of Health Science, Aino University

*** Koai Clinic

**** Former Osaka Central Hospital

***** Koai Hospital

Key Words: COVID-19, psychiatric day-care practical training, learning of nursing students

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響下で行った 精神科デイケア実習の看護学生の学び

井手 敬 昭*, 河野 由 理**, 中 川 尚***
大 島 由美子****, 坂 木 まどか*****

【要 旨】

目的：新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）により実習時間が短縮された精神科デイケア実習での学生の学びを明らかにし、デイケア実習の教育的意義と、COVID-19下における新たな教育方法への示唆を得ることとする。

方法：2021年度に実習を行った94名を対象とし、「デイケア実習を通して学んだこと」の記述を質的帰納的に分析した。

結果及び考察：デイケア実習を半日実施したグループの中で、病棟実習の有無にかかわらず【デイケアの機能と役割】について共通して学んでいた。【利用者を理解するための観察の重要性】について学び、観察することによって個性を持った具体的な【利用者への支援の方法】に結び付けられると学んでいた。また感染症対策を行い短縮した実習であっても、学生が臨地で精神障がいをもっている利用者と交流し、スタッフの利用者への関わりを観察することが必要である。

キーワード：COVID-19, 精神科デイケア実習, 看護学生の学び

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19とする）の拡大に伴い、看護基礎教育機関では臨地での実習の中止や変更、延期を余儀なくされている。日本精神保健看護学会の教育の質向上委員会（2020）が公表した「COVID-19感染拡大に伴う看護基礎教育現場の現状調査」では、精神看護学の実習形態で「従来通り臨地での実習」ができたのは4.5%と少数であり、多くの教育機関では実習場所の変更や時間の短縮、臨地実習と学内演習のミックスなど、実習形態が変更さ

れたと報告している。さらに「臨地実習は中止し、学内演習で対応」という割合が多いと報告している。最新の研究報告では、コロナ禍での精神看護学実習の運用方法を模索しながら、新たな実習のあり方や方法の報告もみられている（平上ら, 2021; 渡邊ら, 2021; 鈴木ら, 2020）。また青井ら（2020）は「新型コロナウイルス感染症発生下における精神看護学実習代替としての学内実習の学び」を報告している。

B大学でも2021年度の精神看護学実習においてCOVID-19の拡大により、臨地実習を中止し、学内実習に変更、また臨地での実習期間と病棟滞在時間の

* Nアート訪問看護ステーション（元藍野大学医療保健学部看護学科）

** 藍野大学医療保健学部看護学科

*** 医療法人光愛会 こうあいクリニック

**** 元健康保険組合連合会 大阪中央病院

***** 医療法人光愛会 光愛病院

短縮という変更を余儀なくされ、実習を行った。臨地実習の時間短縮により精神障がい者と接する機会が少なくなったことから、学生の精神障がい者への理解にも影響が出るのではないかと危惧していた。そのような中、精神科デイケア（以下、デイケアとする）での実習は時間短縮などの変更をしながら継続でき、実習施設側の実習生受け入れ停止期間に該当した学生以外は半日、もしくは1日のデイケア実習を行うことができた。

精神看護学実習におけるデイケア実習に関する先行研究では、精神科デイケアや作業所等での実習後の学生の学びが多く報告されている。精神障がい者と初めて交流したことでそれまでもっていた先入観が変わり、精神障がい者への理解を学んでいた（日野ら、2018）。柿澤ら（2015）は看護学生が「精神に障害をもつ人を一人の人として、また生活者として捉え、その回復を精神障がいからのリカバリーの視点で学んでいた」と報告している。また、山田ら（2010）は医療者以外の福祉従事者の役割や精神保健に関する社会資源の活用と法律に基づく支援サービス、地域チーム医療について学びが深められたと報告しており、デイケア実習は精神障がい者への理解や精神医療福祉への理解につながる実習であることが示唆されている。

COVID-19の感染対策によって実習場の変更や時間の短縮などの実習形態が変更されている中、デイケア実習により、精神障がい者への理解や精神保健医療福祉について学生がどのような学びができていたのかを報告している文献は未だ見当たらない。そこで本研

究の目的は、新型コロナウイルス感染症対策により実習時間が制限された精神看護学実習における精神科デイケア実習での学生の学びを明らかにし、デイケア実習の教育的意義と、新型コロナウイルス感染症の影響下における精神看護学実習の新たな教育方法への示唆を得ることである。

II. 対象と方法

1. 実習の概要

B大学の精神看護学実習は3年次後期に行い、2021年度は94名の学生が履修した。従来の精神看護学実習では、2週間の実習のうち1週目に受け持ち患者の個別性に合わせた看護計画を立案し、2週目は看護計画の実施および評価を行うが、COVID-19の感染拡大に伴い2021年度は実習の方法を変更した。実習期間の1週目は学内での紙上患者もしくは病棟での受け持ち患者に対する看護過程の展開の実習、2週目は学内での地域精神保健医療に関するグループワークとデイケア実習を設定した。詳細は以下に示す（表1）。

1) 1週目の紙上患者および病棟実習の概要

病棟実習がCOVID-19による感染対策のために実習受け入れ停止となった期間と病棟実習の受け入れ可能となった期間で実習方法を変更している。受け入れ停止期間は学内で4日間、紙上患者を使用した看護過程の展開と学生同士によるロールプレイ演習を行い、1日は記録の整理の時間をとった。20名の学生がこの期間に該当した。

表1 2021年度精神看護学実習の概要

実習目的	精神保健医療における看護の役割や機能を学び、精神障がいのある個人とその家族を理解し、精神的健康の回復を促進するための個別的な看護を実践する基礎的能力を養う。	
2週目の実習目標	地域精神保健医療における看護の役割と機能を理解することができる。 * 精神科デイケアを利用しながら地域で暮らす対象者とのかかわりを通して、精神障がいのある個人の地域生活について理解できる。 * 医療施設におけるデイケアの役割と機能および、他職種を含む医療・福祉チームとの連携や協働と、看護の役割が理解できる。 * 特定の地域における精神保健福祉活動に関する情報を収集、分析したうえで課題を明確化し、説明することができる。	
実習の流れ	病棟実習受け入れ停止期間	
	1週目	月・火・水・木 学内で紙上事例を使った看護過程の展開、および学生同士でのロールプレイ
		金 記録の整理
	病棟実習実施期間	
	1週目	月・火・木 病棟実習
		水・金 学内実習（記録の整理）
2週目	月・火・水・木 学内実習（地域精神保健医療についてのグループワーク）もしくはデイケア実習（4日間のうち半日～1日）	
	金 学内実習（まとめ・個別面談）	

病棟実習受け入れ可能となった期間は、3日間、病棟で患者一人を受け持ち、看護過程の展開を行った。病棟実習の時間は1日4.5時間であり、3日間で約13.5時間であった。さらに2日間は学内で記録の整理の時間とした。64名の学生がこの期間に該当した。

2) 2週目の地域精神保健医療に関するグループワークおよびデイケア実習の概要

地域精神保健医療に関するグループワークを3日間で学内で実施し、デイケア実習を半日もしくは1日、まとめの学内実習を1日という構成とした。デイケア実習では、「地域精神保健医療における看護の役割と機能を理解することができる」を目標とした。

デイケア実習は、全日程のうち前半の52名の学生は感染予防対策のため午前(9時~12時30分)、また午後(12時30分~16時)の入れ替え制で、1グループ2~3名の配置とした。残りの32名の学生は1日(9時~16時)の実習で、1グループ5~6名とした。

デイケア実習はCクリニックデイケアで実施した。このデイケアでは、「たのしい生活のイメージを基本にしたコース」と「自己理解を深め就労支援を含め次のステップを目指すためのコース」の2つのコースが設けてあった。実習時間が短いことや感染拡大防止の観点から、学生は「自己理解を深め就労支援を含め次のステップを目指すためのコース」のみに参加した。このコースで学生は、心理教育プログラムなどの利用者参加型の講義形式のプログラムや絵画などの芸術系のプログラムなどの体験をしていた。

2. データ収集方法

1) 調査対象

2021年度B大学にて精神看護学実習を行った学生94名を対象とする。

2) 研究期間

2022年5月~2023年3月

3) 調査内容

実習記録の1つである「デイケア実習の学び」のレポートの中の「デイケア実習を通して学んだこと」の記述内容を分析対象とする。レポートには学籍番号、氏名、実習日、半日もしくは1日の実習時間の区別の項目が含まれている。

4) データ収集方法

2021年度に精神看護学実習を履修した学生に対し、精神看護学実習の実習評価が終了した「デイケア実習の学び」のレポート原本を複写したものを返却し、研究者より文書と口頭で本研究の趣旨について説明し研

究依頼を行った。研究協力に同意できる場合は学籍番号と氏名を切り取った無記名の状態のレポートを、研究者が退室した後に教室の後方に設置した回収箱に投函するよう依頼した。

5) 分析方法

- (1) 学生のレポート記述内容をパソコンに入力後、電子テキスト化した。
- (2) COVID-19下にて実施したデイケア実習の学びに関する内容に焦点を当てながら、データを精読した。
- (3) 上記の焦点を表す部分に着目しながら具体例を抽出し、データの意味内容を損なわないようにコード化を行った。
- (4) 一つのコードには一つの意味内容を含むようにし、類似したコードをまとめ、サブカテゴリー化を図った。
- (5) さらに共通の意味を持つサブカテゴリーを類型化し、カテゴリー化を行った。

信頼性を高めるために研究分担者とディスカッションを繰り返しながら分析結果の信頼性・妥当性の確保を図った。

6) 倫理的配慮

本研究は藍野大学研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号:2021-019)。レポートは無記名で提出するため個人が特定されることはないこと、研究の趣旨、研究目的、内容、研究協力の自由と協力の有無による不利益は一切ないこと、成績評価は終了しており、研究参加の有無による成績への影響はないこと、データの取り扱いに関する個人情報の保護等を文書と口頭で説明し、本研究への協力を得た。

Ⅲ. 結 果

精神看護学実習を履修した学生94名のうち、施設側の実習生受け入れ停止のためにデイケア実習に参加できなかった10名を除いた84名中、研究参加への同意の得られた79名(回収率94.0%)の提出されたレポートを分析対象とした。

1. 対象の概要

表2で示しているように、1・2クール目は病棟実習を実施できずデイケア実習でのみ臨地で実習ができた。3・4クール目は病棟実習を行うことができたが、デイケア実習は半日の時間であった。一方、5・6クール目はデイケア実習を1日行うことができた。そ

表2 実習日程の詳細および学生人数

	日程	学生数(人)	病棟実習	デイケア実習
A グループ	1クール目	15	学内実習	半日
	2クール目	5*		
B グループ	3クール目	18	3日間	半日
	4クール目	14		
C グループ	5クール目	19	3日間	1日
	6クール目	13		

* 実習施設の実習生受け入れ停止のため他の実習期間よりも少人数

ここで、病棟実習の有無および、デイケア実習の実習時間の差があるため各グループに分けて検討を行った。表2のようにデイケア実習半日・病棟実習なしのグループをAグループ、デイケア実習半日・病棟実習ありのグループをBグループ、デイケア実習1日・病棟実習ありのグループをCグループに分けた。本稿ではデイケア実習を半日実施したAグループ・Bグループについての学生の学びを検討した。

以下、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは《》、学生の記述内容を「」で表す。

2. Aグループ(デイケア半日・病棟実習なし)

デイケア実習を半日、病棟実習は行えていないAグループでは、54のコードから8のサブカテゴリー、3つのカテゴリーに分類された(表3)。

1) 【デイケアの機能と役割】

このカテゴリーは《デイケアは安心できる場所》、

《利用者の自己理解》、《プログラムによるコミュニケーションへの効果》、《生活リズムが整う》の4つのサブカテゴリーから構成された。

《デイケアは安心できる場所》は、「地域でコミュニティが広がると利用者さんの自信にもつながる。もし失敗してもデイケアという帰る場があるという点も安心できて良いと感じた。」や「デイケアという場所が利用者さんが、安心して通える場所となっていることを学びました。」との記述から構成された。デイケアは利用者が安心して通所することができる場所であると学生は学んでいた。

《利用者の自己理解》は、「自分を知ることによって強みを知り、自信になったり嫌なことがあったときにどうして嫌なのか、自分を振り返りストレスにも対応できる。自分を知ること、リハビリの一つで病気の再燃を防ぐことに繋がると分かった。」や「参加者がお互いに良いところを話し合うことで、自分の良い部分を知ることができ、自尊心を高めるという目的があることを学んだ。」などの記述から構成された。デイケアで行われているプログラムの内容や、利用者同士やスタッフとの関わりの中で、自己理解を深めることができることを学びとして挙げていた。

《プログラムによるコミュニケーションへの効果》は、「プログラムの中で描いた絵について、説明することで自分の思いを伝える機会を得ることができ、コミュニケーションの練習として実施されていること

表3 Aグループ(デイケア半日・病棟実習なし)学生のデイケア実習の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード	コード数
デイケアの機能と役割	デイケアは安心できる場所	・デイケアが帰って来られる場所であり安心できる ・利用者が安心して通える場所	11
	利用者の自己理解	・自分を知ることにはリハビリの一つで病気の再燃を防ぐことに繋がる ・プログラムの参加者同士で良いところを表現することで自分の良い部分を知ることができる	6
	プログラムによるコミュニケーションへの効果	・プログラムの中で自分の作品を説明することで自分の思いを伝える機会となりコミュニケーションの練習となる	2
	生活リズムが整う	・デイケアに通うことで生活リズムを整えることに繋がる	2
利用者を理解するための観察の重要性	利用者に対する観察	・看護師は利用者の疾患だけでなく、生活背景や社会的役割、利用者の願いや思いなどを包括的に観察することが必要 ・利用者の1日のイメージを持ちながら観察していくことが大切	10
	多職種の視点による観察と連携	・多職種がそれぞれの目的を共有し合い、連携によって利用者を支援している ・多職種の連携により利用者を多角的に見ていくことで利用者の強みをとらえることができる	8
利用者への支援の方法	利用者の目的に沿ったプログラムの必要性	・利用者のデイケアへの目的と合致したプログラムの提供が必要 ・利用者が目標を設定することで自発的に活動し、ケアを受けることができる	9
	利用者を安心させる看護師の関わり	・看護師は空気・間・タイミングを見て利用者が安心できるように声かけをすること ・利用者同士のコミュニケーションを円滑に行うサポートをすることも看護師の役割の一つ	6

が分かった。」などの記述から構成されていた。

《生活リズムが整う》は、「デイケアに通うことも生活リズムを整えていく1つのリハビリになるということも知ることができました。」などの記述から構成されていた。

2) 【利用者を理解するための観察の重要性】

このカテゴリーは、《利用者に対する観察》、《多職種の視点による観察と連携》の2つのサブカテゴリーから構成された。

《利用者に対する観察》は、「看護師の役割は利用者さんの様子をしっかりと観察し、生活を知り治療につなげることだと知った。」、「精神科で大切なものは観察することであると学んだ。普段からの様子との違いを発見することで、利用者さんの小さな変化から、症状の発見につながると学んだ。」、また「看護師は利用者さんの疾患だけでなく、生活背景や社会的役割、利用者さんの願いや思いなどを包括的に観察する。」などの記述から構成されていた。利用者の全体を把握するには疾患だけではなく、思いや意思、生活背景などについても細かな観察と情報収集が大切であることを学んでいた。

《多職種の視点による観察と連携》は、「看護師やOT、音楽療法士、精神保健福祉士がそれぞれの目的を共有し合い、多職種連携によって利用者を支援していることも学ぶことができた。」や「多種種の連携により色々な面から利用者さんを多角的に見ていく事で利用者さんの強みというのを捉えていく力が大きいということが分かりました。」などの記述から構成されていた。デイケアに所属している看護師や心理士、作業療法士、ソーシャルワーカーなどの専門職種の視点から利用者を観察し連携をとることによって、利用者の理解を深めることができると学んでいた。

3) 【利用者への支援の方法】

このカテゴリーは、《利用者の目的に沿ったプログラムの必要性》、《利用者を安心させる看護師の関わり》の2つのサブカテゴリーから構成されていた。

《利用者の目的に沿ったプログラムの必要性》は、「デイケアに通う利用者さんは必ず目的を持っており、プログラムを実施する側と目的が合致すると満足度は高くなると知った。満足度を高くするためには楽しいだけでなく目的を明確にしたプログラムが必要だ。」や「療養者自身が目標を決めることによって、より自発的に活動し、継続的にケアを受けることができると感じた。」などの記述から構成されていた。利用者が主体的に、目的をもってデイケアを利用できるように

利用者のデイケアに通所する目的を把握し、その目的に合ったプログラムを提供することが必要であることを学んでいた。

《利用者を安心させる看護師の関わり》は、「(看護師は) 空気・間・タイミングをみて、利用者さんが安心できるように声掛けをすること」について学んでおり、さらに「デイケアにおける看護士の役割は、疾患や薬剤、ケアのことはもちろん、利用者さん同士のコミュニケーションを円滑に行うサポートをすることも含まれると考える。」などの記述から成り立っていた。利用者が安心してデイケアに通うことができるように看護師が声をかけることや利用者の不安や思いに、寄り添うことが看護師の必要な関わりであると学んでいた。

3. Bグループ (デイケア半日・病棟実習あり)

デイケア実習を半日、病棟実習を3日間行ったBグループでは、82のコードから13のサブカテゴリー、4つのカテゴリーに分類された(表4)。

1) 【デイケアの機能と役割】

このカテゴリーは《他者との交流から社会性を構築する場》、《利用者の自己理解》、《プログラムによるコミュニケーションへの効果》など、7つのサブカテゴリーから構成された。

《他者との交流から社会性を構築する場》は「デイケアを通して人との関わり方を知ったり、自分と向き合うことで人との関わりを学び、考え方も少しずつ変化していく」ことや「様々なプログラムでは利用者同士の交流や活動もあるため対人関係を築くことができると学びました。」、「利用者の中でもコミュニケーションを取っており、日常生活の中でのルーティーンの一部、社会性の構築になっていると感じた。」などの記述から構成された。

《利用者の自己理解》は「デイケアは“自分”を知り、自分への理解を深めていくとともに人との交流の仕方などを知っていく場であると学んだ。」や「デイケアは(中略)気分転換や楽しみをもってもらうことも1つで、その他にも自己理解、自分を知るといった役割も持っているのだと知った。」などの記述から構成されていた。

《プログラムによるコミュニケーションへの効果》は「対人交流やセミナーなど、就労支援につながる活動が積極的に取り入れられていて、利用者さん一人ひとりが主体的に、また、やりがいを持てるデイケアづくりがされていると学びました。」や「ただ楽しむた

表4 B グループ (デイケア半日・病棟実習3日) 学生のデイケア実習の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード	コード数
デイケアの機能と役割	他者との交流から社会性を構築する場	・デイケアを通して人との関わり方や自分と向き合うことで人との関わり方を学ぶことができる ・利用者同士でコミュニケーションをとり、社会性の構築になっている	10
	利用者の自己理解	・自分を知ることが大切である ・デイケアの目的は気分転換や楽しみだけではなく、自己理解や自分を知ること	9
	プログラムによるコミュニケーションへの効果	・利用者一人一人が主体的にやりがいを持てるプログラム作りがされている ・問題解決思考のプログラムで考え方や捉え方を変えてみることの重要性を学んだ	8
	利用者のデイケアに対する目的意識	・利用者自身で目的をもってプログラムを選択していると学んだ ・利用者一人一人が目的や目標をもって通っていること	7
	社会復帰のためのリハビリの場	・精神疾患の再発防止や社会復帰を目的とするリハビリテーションである ・利用者が健康的に地域で生活を送れるように、社会復帰を目指す利用者の架け橋のような場所であること	7
	相談できる居場所	・デイケアはいつでも帰って来ることができる居場所であるということ ・デイケアの役割は話す場や信頼できる人がいるという環境であること	4
	生活を整える場所	・デイケアでは通所することで服の選択など社会性の向上にも貢献し、社会生活のリハビリを行う場である	3
利用者への支援の方法	利用者に自信をつけてもらうスタッフの関わり	・人間関係構築の自信をつけることができるスタッフの関わりがある ・スタッフは利用者に対して肯定的に関わり自信をつくようにしている	5
	スタッフの話しやすい雰囲気作り	・初めてでも参加しやすい雰囲気づくりをしていること ・スタッフや利用者が話しやすい雰囲気を作っている	5
	利用者の目標に合わせた看護師の援助	・利用者の目標を把握し、説明の仕方や安心感を与える声かけが必要 ・ストレングスをほめるだけでなく、コミュニケーションで不足している所や改善すべき所を利用者に伝えることも大切	3
利用者を知るための様々な視点での理解の必要性	スタッフの利用者に対する様々な理解	・看護師の役割は利用者のことを観察し、小さな変化に気づき、利用者を理解すること ・スタッフは言動や生活状況を観察し、異常の早期発見や心の支えとなる役割があること	11
	多職種による専門的な視点からのアセスメント	・多職種が連携しているためいろいろな視点からのアセスメントができる ・たくさんの専門職と連携し1人の利用者をもみんで支援していること	4
学生の精神科デイケアへのイメージの変化	精神科デイケアのイメージの変化	・講義形式で話を聞くプログラムもあり、初めに持っていたデイケアのイメージが違った ・利用者からの発言も少なく静かなイメージだったが、利用者も環境も明るくイメージが変化した	6

めのゲームではなく、ゲームを通したコミュニケーションや自己理解、自己対処、楽しみ、人とのつながりを得ることで1つのゲームが治療になるということを実際に体験し、そして利用者さんとの会話を通して学ぶことができました。」などの記述から構成されていた。デイケアで提供されているプログラムの内容が利用者の目的や目標に合わせて設定されていることや利用者の特性や特徴に合わせて内容も変更していることなどを学んでいた。

《利用者のデイケアに対する目的意識》は「利用者さん自身でプログラムを選んで参加されていると知り、自分の目的を持って、そして、自分の意思で選択しているのだと学んだ。」などの記述より構成されていた。デイケアに通所して、プログラムに参加することは利用者自らが目的や目標をもち、強い意思からデイケアに通い続けることができたり、苦手としている部

分を補おうとプログラムを選択していることを学んでいた。

《社会復帰のためのリハビリの場》は、「(利用者が)自分の症状に向き合い、正しい知識や対処法を講義形式で学ぶことによって社会復帰してからも落ち着いて過ごすことにつながると学びました。」や「利用者さんがより健康的に地域での生活を送れるように、社会復帰を目指す利用者さんの重要な架け橋のような場所であることを学びました。」などの記述から構成されていた。

《相談できる居場所》は、「利用者さんは自分には、いつでも帰って来れる居場所がある、ということを実感されているのではないか」ということを感じており、「話す場がある、信頼できる人がいるという環境が、人として安心できる場所となる。安心できる居場所というのが、デイケアの役割の1つでないかと学んだ。」

などの記述より構成された。

《生活を整える場所》は「(デイケアに通所すると)病院でなく外を出歩く人と会って交流するということから寝衣でなく、服を考えて組み合わせ着るという社会性が向上する。」などの記述から構成された。

2) 【利用者への支援の方法】

このカテゴリーは《利用者に自信をつけてもらうスタッフの関わり》、《スタッフの話しやすい雰囲気作り》、《利用者の目標に合わせた看護師の援助》の3つのサブカテゴリーから構成されている。デイケアスタッフの利用者への関わりを学生は学んでいた。

《利用者に自信をつけてもらうスタッフの関わり》は「今後の人間関係構築の自信をつけることができるような(スタッフの)関わりをされていると学びました。」や「スタッフとメンバーさんとの関わりは全て肯定的で、自信がつきやすく、次の行動に移りやすくなっている」などの記述より構成された。スタッフは利用者に自信を持ってもらえるように意図的に関わっていることを学んでいた。

《スタッフの話しやすい雰囲気作り》は「初めてでも参加しやすいような雰囲気があって、そういった雰囲気づくりが大切だと感じました。」や「スタッフさんが話す機会を与えて下さったり、(中略)スタッフさんメンバーさんともに話しやすい雰囲気を作ってくださっているからだと感じた。」などの記述から構成されていた。初めて参加する利用者が参加しやすく、また話もしやすい環境をスタッフが整えていることを学生は学んでいた。

《利用者の目標に合わせた看護師の援助》は「デイケアでは利用者さんの目標を把握し、達成できるよう声かけをしていくことが大事だと考え、声かけの中で、ただ“頑張らしましょう”と言うのではなく、その利用者さんに合わせ説明の仕方や安心感を感じてもらえることができるような声かけをさりげなく行うことが大切であると学ぶことができた。」などの記述から構成されていた。

3) 【利用者を知るための様々な視点での理解の必要性】

このカテゴリーは《スタッフの利用者に対する様々な理解》と《多職種による専門的な視点からのアセスメント》の2つのサブカテゴリーから構成されていた。

《スタッフの利用者に対する様々な理解》は「プログラムやそれ以外の関わりを通して、利用者さんのことを観察し小さな変化に気付く、感じたことを声かけすることで利用者さんのことを理解することだと考え

る。」や「利用者さんの観察をしっかりと行い、言動や生活から、精神的な状態や身体状況をアセスメントし、異常を早期発見したり、利用者さんにより添うことで、人間関係を構築し、相談相手になったりなど、心の支えとなる役割があるということも学んだ。」などの記述より構成されていた。利用者を理解する重要性を学生は学んでいた。

《多職種による専門的な視点からのアセスメント》は「デイケアでは看護師や医師、PSWなど他職種が連携しているため色々な視点からのアセスメントと評価を行うことができ、利用者さんの変化や悩みに気付くことができると学んだ。」や「デイケアではたくさんの専門職との連携をしているため、1人の利用者を含んで支援していることを学んだ。」などの記述より構成されていた。

このカテゴリーでは、看護師や多職種による様々な視点による観察から、利用者を理解することの必要性についての学生の学びを表していた。

4) 【学生の精神科デイケアへのイメージの変化】

このカテゴリーは《精神科デイケアのイメージの変化》の1つのサブカテゴリーから構成されていた。

《精神科デイケアのイメージの変化》は「プログラムに参加する前は、精神科デイケアのイメージとして集団でレクリエーションのような活動をしているという感じなのかと思っていただけ、体験を通して講義をするプログラムもあることを知り、自分の思っていたイメージとの違いを感じることができました。」などの記述より構成されていた。学生が当初抱いていたレクリエーションをするようなデイケアのイメージが、実際に実習で体験することで、デイケアには様々な目的に沿ったプログラムがあることを知り、デイケアの機能の理解が深まっていた。

IV. 考 察

本研究は、新型コロナウイルス感染症対策により実習時間が制限された精神科デイケア実習での学生の学びを明らかにし、デイケア実習の教育的意義と、COVID-19下における精神看護学実習の新たな教育方法への示唆を得ることを目的としている。学生の学びの中からAグループ、Bグループのカテゴリー間の共通点について考察を進めていく。Aグループで抽出されたカテゴリーについては【 】(A)、Bグループで抽出されたカテゴリーは【 】(B)と表記する。

1. 半日のデイケア実習を行った A グループと B グループの学びの共通点

【デイケアの機能と役割】(A) (B) についてはどちらのグループにおいても学生が学んだこととして抽出された。デイケアは利用者にとって安心できる場所であると学生は考えていた。デイケアは利用者が自分自身を知ること、自分の特性を理解する《利用者の自己理解》ができる場所であり、自己理解を促進させる機能も有していると学生は考えていた。さらに《プログラムによるコミュニケーションへの効果》でもわかるように、参加しているプログラムの中で自分の思いを伝える機会が、コミュニケーションの練習になることを学んでいた。障がいを持ちながら地域で生活を送っている利用者が安心してデイケアに通所したり、スタッフや利用者へ相談ができたり、同じ障がいを持っている人同士と交流を持ち、コミュニケーションの練習をすることが利用者にとっての【デイケアの機能と役割】であることを実習を通して学生は学んでいた。澤田ら（2008）は、「心の拠り所や仲間同士の関係性の構築、医療者との相談窓口としての機能を備えた『居場所』は、自己の安定が図れ、デイケアが精神的な安寧と地域での生活を維持していくための治療的な環境となり得ている。」と報告しており、今回と同様の内容について学生は学んでいた。

【利用者への支援の方法】(A) (B) のカテゴリーより、《利用者を安心させる看護師の関わり》や《利用者へ自信をつけてもらうスタッフの関わり》《スタッフの話しやすい雰囲気作り》など、デイケアスタッフが利用者へ安心してもらえるような関わりをもち、デイケアを居心地の良い場所、安全な場所であることを理解してもらい、デイケアへの通所が継続できるようにすることや、利用者の自信がつくようにさりげない言葉がけや態度を実践していることに学生は着目していた。石橋ら（2018）は、精神科デイケアや就労支援施設での実習により、学生は精神障がい者にとって安心していられる場であることを学んでいたと明らかにしている。本研究でも、同様の内容が考察された。

また《利用者の目的に沿ったプログラムの必要性》や《利用者の目標に合わせた看護師の援助》から、利用者自らが考えている自己の生活の目標などからもデイケアに通う目的を考えており、デイケアではその利用者の目標を利用者と共有して、達成するためのプログラムの提供により援助している。それが【利用者への支援の方法】(A) (B) として抽出されたと考える。日野ら（2018）の報告では、精神障がい者への理

解の中で「目標をもって通所する様子」が学生の学びとして示されており、同様の結果が得られている。

【利用者を理解するための観察の重要性】(A) や【利用者を知るための様々な視点での理解の必要性】(B) では、利用者を疾患だけではなく、生活背景や生活状況、また利用者の願いや思いなども含めて理解することの大切さを学んでいた。その際には看護師だけの視点ではなく、デイケアに所属している作業療法士や心理士などの専門スタッフのそれぞれの専門的な視点からの観察が、より利用者の理解を深めるためにも重要であることを感じ取っていた。さらには多職種による観察から得られた情報が、利用者への支援に役立てることができると学生は学んでいた。学生は看護師以外の多職種のスタッフによるプログラム中の関わりや休憩時間などの利用者への関わり方、さらに声のかけ方などを観察していた。さらに振り返りのカンファレンスでの看護師の指導者からのコメントからも多職種の連携について学び、その重要性について学ぶことができたと考える。先行研究（日野ら、2018；吉野ら、2007）においても多職種との連携の重要性について述べられていた。さらに石橋ら（2018）は他機関と連携した支援が大切であると学生が理解していたと述べている。

しかし本研究では、他機関との連携についての学びは抽出されなかった。それはデイケア実習が半日という限られた時間での実習で、学生が参加したプログラムの多くが心理教育プログラムなどの講義形式であり、休憩時間やプログラム終了後に利用者と一緒に会話をしている時間が短かったという状況があったことが、他機関との連携についての学びが抽出されなかった理由ではないかと推測された。学生と利用者が会話する機会が少なかったことで、利用者のこれまでの苦労や受けてきたサポートについての体験を聞くことができなかつたと予想される。そのため他機関との連携という点についての学びが現れていないと考える。

2. 新型コロナウイルス感染症への対策時期におけるデイケア実習の教育的意義について

学生のデイケア実習での学びから、精神看護学実習におけるデイケア実習の教育的意義について考察していく。COVID-19 対策のため、デイケア実習が半日であったが、先行研究で1日もしくは数日のデイケアや社会復帰施設などの実習の学びと同様の内容の学びが得られていた。COVID-19 の拡大によって実習期間の短縮や病棟実習が実施できなかったこと等、従来

通りの実習が行えなかったが、デイケア実習を行うことによって実習目標にある、「精神科デイケアを利用しながら地域で暮らす対象者とのかかわりを通して、精神障がいのある個人の地域生活について理解できる」は達成できていると考えられる。それは、精神障がい者と関わるのが少なかった学生が、実際にデイケアに通所している利用者の様子を観察することができたことやスタッフとの関わりを観察することで、漠然としたイメージしかなかった精神障がいや精神障がい者をしっかりとイメージすることができたためではないかと考える。しかし、1つの実習施設であり、さらに実習時間の短さによって、地域との連携や利用者の継続的な支援についての学びを得ることは難しかった。感染症の感染拡大が起こった際でも、半日であってもデイケアの実習に参加することによって、精神障がい者の理解や彼らを理解するための多職種との連携について、また看護の役割や看護の方法について学ぶことができおり、臨地で実習をすることの意義は大きい。今後、COVID-19の再度の感染拡大やその他の感染症の出現などにより実習の方法を再度検討する必要性が出るのが考えられる。その場合には、実習期間の短縮化や臨地に滞在する時間の短縮などの対策を講じた形での臨地実習を行うことが必要であり、短時間でも精神障がい者と場所や時間を共有し、交流することが精神障がい者の理解へとつながると考える。

V. 本研究の限界

本研究は学生の課題レポートの分析であり、限られた記載スペースの中で、評価を意識した記載である可能性が考えられ、学生の学びの全てを分析できているとは言い難い。また1施設での実習場での体験を記載しているため、一般化には限界がある。今後は複数の実習場での学生の学びを分析することによって、偏りのない検討ができると考える。

VI. 結 論

1. 新型コロナウイルス感染症対策により実習時間が制限された精神科デイケア実習での学生の学びは、【デイケアの機能と役割】を病棟実習の有無にかかわらず、共通して学んでいた。【利用者を理解するための観察の重要性】について学び、観察することによって個別性を持った具体的な【利用者への支援の方法】に結びつけられることを学んでいた。

2. 感染症対策のない平時の実習での学びと感染症対策のため短縮された実習での学びは同様の学びをしており、短縮した実習であっても、学生が臨地で精神障がいを持っている利用者やスタッフと交流し、さらにスタッフの利用者への関わりについて観察することが必要である。

利益相反状態の開示

開示すべき利益相反はない。

文 献

- 青井みどり, 別宮直子 (2020). 新型コロナウイルス感染症発生下における精神看護学実習代替としての学内実習での学びの検証, 健康生活と看護学研究, 3, 20-22.
- 日野雅洋, 石橋照子, 大森真澄, 他 (2018). 精神科デイケア・障害福祉サービス施設での看護学生の学び, 島根県立大学出雲キャンパス紀要, 14, 45-51.
- 平上久美子, 澤田由美, 山岡八千代 (2021). 【オンラインで学びを深める協同学習】臨地協同学内実習の開発と実践 まるで病棟にいるような精神看護学学内実習をめざして, 看護教育, 62(8), 786-794.
- 石橋照子, 大森真澄, 松谷ひろみ (2018). 精神障がい者のエンパワメント支援を学ぶための教育プログラムの検討 社会復帰施設でのフィールド学習における学びの分析から, 日本医学看護学教育学会誌, 26(3), 61-69.
- 柿澤美奈子, 田中高政, 塚田縫子 (2015). 精神看護学実習における精神科デイケアおよび就労継続支援 B 型事業所での学生の学び SPSS Text Analytics for Surveys を用いて, 佐久大学看護研究雑誌, 7(1), 25-34.
- 日本精神保健看護学会 教育の質向上委員会 (2020). COVID-19 感染拡大に伴う看護基礎教育現場の現状調査. URL: <https://www.japmhn.jp/a/1057>. (閲覧日 2022/1/7)
- 澤田由美, 丹下幸子 (2008). 学生が捉えた精神科デイケアセンターの機能と教育方法への課題 精神看護学実習記録からの検討, 新見公立短期大学紀要, 29, 89-94.
- 鈴木祐子, 井上聡子 (2020). 新型コロナウイルスの影響による精神看護学実習のあり方 シミュレーションを活用した学内実習, 精神科看護, 47(10), 062-067.
- 渡邊久美, 蔵本綾, 長尾みゆき (2021). 【臨地実習の再構築「学ぶ機会」を取り戻す臨床と教育の連携】(Part 2) 教育機関の取り組み事例 コロナ禍での精神看護学実習における臨地との連携に関する振り返り 地域活動支援センターむつみ会での継続実習を中心に, 看護展望, 46(9), 890-893.
- 山田浩雅, 中戸川早苗, 糟谷久美子, 他 (2010). 精神科デイケア・小規模作業所における地域精神看護学実習の学び 実習レポートの分析より, 愛知県立大学看護学部紀要, 16, 23-30.
- 吉野賀寿美, 佐久間えりか, 笹木弘美, 他 (2007). 社会

井手他：COVID-19 下での精神科デイケア実習の学生の学び

参加を支える施設での実習を通しての学生の学び
看護者としての学びに焦点を当てて. 北海道医療

大学看護福祉学部紀要 (14), 57-64.